様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月２８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2010 年
課題番号：19520183
研究課題名（和文）　**比較文学の視点による英雄叙事詩の研究**

研究課題名（英文）　Heroic Poetry in Comparative Perspective

研究代表者
寺田　龍男（TERADA TATSUO）
北海道大学大学院・メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：30197800

研究代表者の専門分野：ドイツ文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：ドイツ文学、日本文学、比較文学、英雄叙事詩、軍記物語

１．研究計画の概要

(1) 軍記物語と英雄叙事詩を比較する意義を記述する。
(2) 英雄叙事詩の語彙分析をすすめる。
(3) 「ディートリヒの歴史叙事詩」をなす『アルプハルトの死』・『ディートリヒの敗走』・『ラヴェンナの戦い』の翻訳をおこなう。（平成 21 年度は『ディートリヒの敗走』に取り組んだ。）

２．研究の進捗状況

(1) 軍記物語研究では従来から、生田弘治らによる「叙事詩」概念の桎梏をなかなか克服できなかったが、最近の軍記物語の研究動向に学びつつ、これまでの研究状況をドイツ文学研究者として考察した。とくに日本だけでなく海外でも影響が大きい小西甚一の研究、および小西が依拠したバウラ、ロードらの論説を検証した。その上で、軍記物語と英雄叙事詩を包括する上位概念の設定を提起した。
(2) 平成 20 年度から、英雄叙事詩『ヴィルギナール』の写本 3 系統（V10, V11, V12）にあらわれる紛争・平和・調停・交渉・儀礼等に関する語彙を実証的に考察している。平成 21 年度は「戦士」とその「敵」を表わす様々な語を統計的に分析する論文を別個に執筆した。これらにより、同一の作品でも写本により大きな異同が生じることを統計的に証明できた。また『ヴィルギナール』（V12）の語彙の傾向については、部分的ながら通説とは異なる事例を示すことができた。
(3) （近年歴史学者アルトホフらにより西洋でも主張され始めた）文芸作品を「史料」として用いる方法論に関する議論に貢献するため、昨年度の『アルプハルトの死』につづき『ディートリヒの敗走』の翻訳を進めた。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
（理由）
(1) 比較の意義に関する論考（雑誌論文①）は、本研究においてもっとも重要な核をなす成果であり、少なからぬ研究者から（建設的批判とともに）ポジティブな批評が寄せられたのは幸いであった。
(2) 英雄叙事詩『ヴィルギナール』に関する考察（雑誌論文②）は４月１日に北海道大学図書館のホームページで公開されたが、申請者の論文としてはダウンロードされる頻度がもっとも高いペースで推移している。雑誌論文③とともに具体的な評価を受ける段階には至っていないが、一定の成果は得られつつあると考えている。
(3) 進捗状況の(1)および(2)と比べ、翻訳が進まなかったのはまことに遺憾である。次年度以降できるだけ早期に完成させ、すでに完成している『アルプハルトの死』に加えて『ラヴェンナの戦い』も翻訳し、著作権者の了解を得て公開ないし刊行する所存である。

４．今後の研究の推進方策

(1) 「比較」については課題が残っている。生田弘治が導入した「叙事詩」の概念は当時（1906 年）としては画期的であったろうが、概念が一人歩きしたのは否めな

い。今日中世ドイツ文学でもっとも知られる作品のひとつである『ニーベルンゲンの歌』の本格的な翻訳や研究論文は、中島悠爾の書誌研究によると、日本では1930 年代以前に遡ることができないからである。それにもかかわらずヨーロッパの叙事詩と日本の『平家物語』などを「叙事詩」として同一視する傾向が強まった事情はなお考察の余地がある。異なった文化圏で相互にまったく関係なく成立した作品を比較する意義についてはハンス・フロムが先駆的研究をおこなっているのでその論を考究する。さらに比較をより包括的に行い、かつ海外のドイツ文学研究者が日本（文学）の研究状況をより容易に理解できるよう、視点を軍記物語から中世日本文学に広げ、可能な限りその特徴やヨーロッパ文化圏との相違点・共通点を論ずる考察を（ドイツ語で）執筆する必要がある。

(2) 平成22年度は『ヴィルギナール』の3系統をこれまでとは異なる視点から分析する。すなわち「戦士」やその相手ではなく、さまざまなモチーフごとに比較してそれぞれの特徴、共通点と相違点を明らかにしたい。文献学の基礎作業として、今後もこの方針を継続する。

(3) 翻訳は、比較ないし対比研究のためのもっとも重要な基盤となる。日本の中世文学は、欧米圏ではすでにきわめて多くの翻訳があるが、日本では中世ヨーロッパ文学の翻訳がまだ少ない。したがって研究の比重を従来より大きく翻訳にかけることとなる。

５．代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①寺田龍男、Der Wortschatz bei >Virginal< – Versionen (V10), (V11) und (V12) – Teil 2: Heiden und außer- sowie übernatürliche Wesen、メディア・コミュニケーション研究５８号、（印刷中）、2010 年、査読有
URI: http://hdl.handle.net/2115/40057

②寺田龍男、Der Wortschatz bei >Virginal< – Versionen (V10), (V11) und (V12) – Teil 1: Kriegerbezeichnungen、独語独文学研究年報３６号、６２－７９、2009 年、査読有
URI: http://hdl.handle.net/2115/42882

③寺田龍男、軍記物語と英雄叙事詩（５）—概念規定に関する諸問題—、メディア・コミュニケーション研究５７号、３５－５４、2009 年、査読有

④寺田龍男、軍記物語と英雄叙事詩（４）—享受史の一側面—、メディア･コミュニケーション研究院『メディア･コミュニケーション研究』54 号、１－１７、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕なし